オーディオ実験室収載

スピーカーアキュライザーの導入(17)
－アナログ対ディジタル(3)－

１．始めに

前報(16)に引き続き、アナログ音源とディジタル音源の比較を行ってみます。

２．スピーカーアキュライザーSPA-7 の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7 の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、ケーブルの接続条件を前報(14)のとおり替えています。

試聴音源はバッハの無伴奏ヴァイオリンソナタとパルティータに固定し、アナログ盤、CD、STAGE+から選択します。

アナログ盤

ドイツグラモフォン　4836926

ナタン・ミルシュテイン(ヴァイオリン)

CD

ドイツグラモフォン　UCCG9719/20

ヘンリク・シェリング

UC UCCY-1049/50

千住真理子(ヴァイオリン)

STAGE+

Bach: Complete Sonatas, Partitas & Suties for Violin, Cello & Guitar

Shlomo Mintz(ヴァイオリン)

３．スピーカーアキュライザーSPA-7 の試聴結果

アナログ盤は LP-12、CD は EMT981、STAGE+は PC 経由で再生します。

ミルシュテインのアナログ盤は、1973 年の録音で、ミルシュテインの艶のある音での丁寧なボウイングの演奏が聴けます。

シェリングの CD は、1967 年の録音で、ふくらみのある音で、フレージングの取り方がしっかりしており、定番の演奏と言った感じです。録音は古いですが、音質的には次の住真理子に引けをとりません。

千住真理子の CD は、2014 年の録音で、ガット弦らしい味わいがありますが、フレージングの取り方がやや単調なものの胴鳴りや間接音はしっかり捉えられています。なお、これら 2 枚の CD は、以前に比べてディジタル臭さが後退しています。

Mintz の STAGE+は、対応する CD は 2003 年発売となっています。抑揚、緩

急、切れ味と力強さもあり、現代の代表的な演奏と言えます。音質は、とても配信とは思えないフレッシュさがあります。

４．まとめ

3 種の音源とも以前とは様変わりしています。アナログ、CD、STAGE+とも持ち味が発揮されており、録音の新旧の差を感じさせません。また、CD、STAGE+が随分とアナログに近い音になっています。

以上